A区分・C区分共通

No.1（実演芸術・メディア芸術　共通）

令和7年度舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）出演希望調書(実演芸術・メディア芸術　共通)

別添	あり

分野、種目（該当する分野、種目を選択してください。）

分野	メディア芸術	種目	映像

応募区分（応募する区分を選択してください。）

応募区分	A区分

複数応募の状況（該当するものを選択してください。）　※B区分継続団体については、応募企画数から除く

複数応募の有無	有	応募総企画数	3企画

複数の企画が採択された場合の実施体制（該当するものを選択してください。）

※複数応募の有無で【無】を選択された場合は、未記入で構いません。(グレーアウトされます。)

複数の企画が採択された場合の実施体制	公演の実施時期が重複しなければ、複数の企画を実施可能

文化芸術団体の概要

ふりがな 制作団体名	いっぱんしゃだんほうじんこどもえいがきょうしつ 一般社団法人こども映画教室		団体ウェブサイトURL https://www.kodomoeiga.com
代表者職・氏名	代表理事　土肥悦子		
制作団体所在地	〒 150-0036	最寄り駅（バス停）	渋谷駅
	東京都渋谷区南平台町4-13 南平台ハイツ2F		
電話番号	050-3188-1549		
ふりがな 公演団体名	こどもえいがきょうしつ こども映画教室		団体ウェブサイトURL https://www.kodomoeiga.com
代表者職・氏名	代表理事　土肥悦子		
公演団体所在地	〒 150-0036	最寄り駅（バス停）	渋谷駅
	東京都渋谷区南平台町4-13 南平台ハイツ2F		
制作団体　設立年月	2013年4月（2019年1月一般社団法人化）		
制作団体組織	役職員	団体構成員及び加入条件等	
	土肥 悦子（代表理事） 諏訪 敦彦（専務理事） 藤岡 朝子（理事）・原 悟（理事） 林 知一（理事）	団体社員：土肥 悦子・諏訪 敦彦 従業員（事務局）：浅見 孟 団体社員加入条件 社員総会での協議の上、加入	
事務体制 事務(制作)専任担当者の有無	他の業務と兼任の担当者を置く	本事業担当者名	浅見孟
経理処理等の 監査担当の有無	有	経理責任者名	土肥悦子
本応募にかかる連絡先 （メールアドレス）	kaikei.kodomoeiga@gmail.com		

<table>
<tr><td>制作団体沿革・
主な受賞歴</td><td colspan="3">2004年　金沢コミュニティシネマが主催（金沢21世紀美術館共同主催）として、
前身となる「こども映画教室」を石川県金沢市が拠点として開催（以降毎年開催）
2013年　任意団体「こども映画教室」として、東京都を拠点に活動開始。
活動地域が全国に広がる。
2015年　上映会およびシンポジウム「こどもが映画と出会うとき」を主催（以降毎年開催）
2017年　フランスのシネマテーク・フランセーズが主催する教育プログラム「Le Cinéma, cent ans de jeunesse（映画、100歳の青春）」に、世界で15カ国目の参加国、そして日本初のコーディネーターとして参加。
2019年～　「一般社団法人こども映画教室」として法人化。
文化庁「文化芸術による子供育成総合事業―巡回公演事業―」受託
2023年～　東京国際映画祭主催「映画教育国際シンポジウム2023」企画運営</td></tr>
<tr><td>学校等における
公演実績</td><td colspan="3">小中高生向け映画ワークショップ実施実績　累計　約200回
2019年より巡回公演・文化施設等活用事業等での実施実績あり　累計 49校

詳細は【別添シート】（1）参照</td></tr>
<tr><td>特別支援学校等に
おける公演実績</td><td colspan="3">「令和元年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演－」にて特別支援学級の児童と普通学級の児童混合でワークショップをおこない、その後も毎年の巡回公演において、そのように普通学級との混合で実施している。特に学校から「いつも登校できなかったり、学級に入れない子がこの公演では一緒に楽しむことができた、と報告をいただいた。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">参考資料の有無</td><td>申請する演目のWEB公開資料</td><td colspan="2">有</td></tr>
<tr><td>※公開資料有の場合URL</td><td colspan="2">https://youtu.be/4SGzb7CRDvo</td></tr>
<tr><td rowspan="2">※閲覧に権限が必要な場合のIDおよび
パスワード</td><td>ID:</td><td>なし</td></tr>
<tr><td>PW:</td><td>なし</td></tr>
</table>

別添	あり

公演・ワークショップの内容　　【公演団体名　こども映画教室　】

対象	小学生(低学年)	○	小学生(中学年)	○
	小学生(高学年)	○	中学生	○

企画名	映画の対話型ワークショップをしよう！映画撮影の実演鑑賞
企画のねらい	詳細は【別添シート】(2)を参照 私たちは本事業を実施するにあたって、下記の6項目を「企画のねらい」としています。 ❶主体的な観客を育てる　❹映画を深く鑑賞する ❷発想力の育成や芸術鑑賞能力の向上　❺ﾒﾃﾞｨｱﾘﾃﾗｼｰとして、映画撮影の実演を見ることで映像が創作物であることを理解する ❸名作鑑賞による地域交流　❻映画づくりには正解がないことを伝える
作品(コンテンツ)選択理由	世界に誇る日本の名匠、小津安二郎監督の不朽の名作『お早よう』 。映画館が街中からなくなっている今、体育館が映画館に変わるということは、地域の大人も含めて体験してもらいたいことである。その鑑賞に『お早よう』は最適であると考える。1959年の作品ではあるが、主人公の少年たちの気持ちは今のこどもたちでも共感できる。コミカルなシーンも多く、こどもたちにも大人にとっても忘れがたい映画鑑賞となるだろう。また、日本が世界に誇る映画監督である小津安二郎作品をこういう機会にぜひ鑑賞してもらいたい。

児童・生徒の参加可能人数	メインプログラム	最大100名～250名想定　※映画鑑賞は定員なし （対象学年のみで行う、全校生徒で行う等、学校と相談のうえ対応可能です。）
	ワークショップ	最大100名～250名想定　※映画鑑賞は定員なし （対象学年のみで行う、全校生徒で行う等、学校と相談のうえ対応可能です。）

プログラム全体の流れ

【プログラムの構成】

	ワークショップ1回　→　メインプログラム
	ワークショップ2回　→　メインプログラム
○	ワークショップ → メインプログラム → ワークショップ
	メインプログラム　→　ワークショップ2回
	メインプログラム　→　ワークショップ1回

【全体の流れ】

【別添シート】(3)参照

実施時間 WS1回目 20分　メインWS　140分　WS2回目 55分　合計　215　分

指導体制	映画監督（特別講師）※1：萩生田宏治、前田哲、深田隆之、瀬田なつき、大川景子、五十嵐耕平、山本英、太田達成、髙橋壮太 ｴｸﾞｾﾞｸﾃｨﾌﾞﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ：土肥悦子 映画鑑賞・制作ファシリテーター：糠塚まりや、奥定正掌、飯岡幸子、西原孝至、山本大輔、小林和貴、藤田開、加藤紗希、蘇鈺淳、川崎たろう、大井里花子 ﾒｲｷﾝｸﾞｽﾁｰﾙ撮影監督：中村隆一 ﾁｰﾌﾃｸﾆｶﾙﾏﾈｰｼﾞｬｰ：酒井貴史 ﾃｸﾆｶﾙﾏﾈｰｼﾞｬｰ：相馬航佑 プロデューサー：浅見孟 プログラム監修：諏訪敦彦（映画監督・東京藝術大学大学院教授） ※1　巡回スケジュールにより1名を派遣
演目の芸術上の中核となる者（メインキャスト、メインスタッフ、芸術監督等）の個人略歴 ※3名程度 ※3行程度／名	**萩生田宏治監督：**監督作『楽園』（00、トロント国際映画祭、釜山国際映画祭招待作）、『帰郷』（04）、『神童』（06）等 **前田哲監督**：監督作『ブタがいた教室』（08、東京国際映画祭 観客賞・審査員賞）、『そして、バトンは渡された』（21、報知映画賞 監督賞）、『九十歳。何がめでたい』（24） **深田隆之監督**：監督作『ある惑星の散文』（18、ベルフォール国際映画祭正式招待）、『ナナメのろうか』（22、サン・セバスティアン国際映画祭正式招待）等

従事予定者数 （1回あたり） ※ドライバー等訪問する業者人数含む	**17名**	**運搬**	ハイエース 積載量：　1　t 車　長：　4.265　m 台　数：　3　台

	【ワークショップ】	**【メインプログラム】**
実施にあたっての会場条件および学校側が必要な準備等 ※採択決定後、採択団体へ学校側に提示する条件の確認書の作成をお願いします。	会場：体育館の舞台上で演技をするスペースと持ち込みスクリーンなど上映・音響機材を設置し、映像を鑑賞できる環境、かつ参加するこどもたちが座れるスペースが確保できること。 また、学校備品である机・イス・教卓などを適宜、体育館に移動。 また、日中でもカーテン、暗幕などで会場が暗くできること。 準備物：マイク等の音響設備	会場：体育館、視聴覚室等、常設スクリーンまたは持ち込みスクリーンなど上映・音響機材を設置し、映像を鑑賞できる環境、かつ参加するこどもたちが座れるスペースが確保できること。 また、日中でもカーテン、暗幕などで会場が暗くできること。 準備物：マイク等の音響設備、椅子（こどもが座席に座る場合、地べたでも可）
当日の所要時間（タイムスケジュール）の目安	前日（準備：1.5～2時間） 15:00　学校到着＆先生方と打ち合わせ 　　上映会場暗幕設置などの設営 　　上映リハーサル 当日 ワークショップ1回目　（20分） 8:40 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ 　※全体の流れ① 9:00 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ1回目終了 ワークショップ2回目　（55分） 11:20 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ 　※全体の流れ④⑤ 12:15 終了 ~17:00 上映機材搬出	当日 8：40 メインプログラム開始（160分） 　※全体の流れ②③ 11:20 メインプログラム終了

本公演 実施可能日数目安 ※実施可能時期については、採択決定後に確認します。（大幅な変更は認められません）	6月	7月	8月	9月
	13日	14日	5日	18日
	10月	11月	12月	1月
	16日	14日	20日	
	※平日の実施可能日数目安をご記載ください。		計	100日

企画に係るビジュアルイメージ （舞台の規模や演出がわかる写真） ※採択決定後、図面等の提出をお願いします。	

著作権、上演権利等の許諾状況	各種上演権、使用権等の許諾手続きの要否	該当あり	該当コンテンツ名	『お早よう』	
	該当事項がある場合	権利者名	松竹株式会社	許諾確認状況	使用(上演)許諾取付済

※A4判6枚以内に収まるように作成してください。

別添	なし

本事業への応募理由　【公演団体名　こども映画教室　】

本事業に対する取り組み姿勢、および効果的かつ円滑に実施するための工夫	①本事業に対する取り組み姿勢 こどもたちに対して、映画に関するワークショップを専門的に実施している団体として、学校教育の中で、“映画芸術の本質と出会う”体験をしてもらい、普段体験することのできない名作の鑑賞や映画撮影を学校教育の中で体験してもらう。 　この巡回公演によって、こどもたちの発想力やコミュニケーション能力が育成され、将来の映画人の育成や、映画鑑賞能力の向上を目的とし、取り組む。 具体的には、映像制作のプロであるだけではなく、すでに小学生、中学生たちとともに映画撮影体験や映画鑑賞のワークショップをして、ファシリテーションについても知識や技術のあるスタッフとこどもたちが出会うこと自体がこどもたちにとって、深い体験となる（本気の大人に出会う）。 また、こども映画教室では、大人が指導するのではなく、こどもたちの自主性を尊重し、こどもたちみずからが主体的にワークショップを体験することを大事にしている。映画、という敷居の低い芸術に出会うとき、こどもたちはワクワクととても楽しそうに自発的に動き考え、友だちとコミュニケーションを図っていく。そうして、映画ができるころには自分に自信がつき、コミュニケーション能力も高まっているのである。 こども映画教室は、これまで、映画祭（東京国際映画祭、なら国際映画祭、高崎映画祭など）や、大学（早稲田大学、東京藝術大学など）、フィルムコミッション（信州上田フィルムコミッション）、各地のアート系映画館（シネマ尾道、シネモンド、シネマテークたかさきなど）など、映画や教育の関連団体との共催事業をしてきたが、そこでは映画に関心のある家庭のこどもたちが多く、あまり映画や芸術に関心のないこどもたちやそういった家庭のこどもたちは応募してこなかった。 しかし、自己肯定感を持ちにくい今の時代、どんなこどもにも映画制作や映画鑑賞の体験をしてほしいと思っていたため、本事業は、公教育での実施が可能であり、とても素晴らしい機会だと思い、申請した。 ②事業を効果的かつ円滑に実施するための工夫 実施校とは、密に連絡を取り合い、学校側の希望に合わせて、必要な準備工程、スケジュールを確認し合いながら事業準備を図る。上映場所についても夏や冬場の体育館での上映よりも視聴覚室など冷暖房設備のある場所を検討するなどして、児童生徒が快適な環境で鑑賞体験ができるよう工夫する。また、地域にホールなど映画上映に適した文化施設があり、協力を得られるようであれば、そういった施設の利用もする。 メインプログラムやワークショップの内容についても、実施校の施設状況や受け入れ体制に合わせ、実施校と相談し構成をする。なるべく臨機応変に学校側の希望に沿うようにしていくことが可能。

別添 ※別添は1企画につき3枚までとします。※文字のポイントの変更は認めません。

リンク先	No.1	【公演団体名 こども映画教室 】
学校等における公演実績	小中高生向け映画ワークショップ実施実績　累計　約200回 2019年より巡回公演等での実施実績あり　累計 48校 2013年　横浜市教育委員会後援、東京藝術大学大学院映像研究科協力のもと 「こども映画教室@ヨコハマ2014」実施（2014年、2015年、2016年も実施） 2014年　世田谷区奥沢小学校 奥沢体験楽校にて「映画のおもちゃをつくろう！」（課外活動）開催 2015年　横浜市立新田小学校「こども映画教室＠新田小学校」を（総合の時間・国語などの授業で）開催 「全国映連第44回 映画大学in今治」にて「映画館と街、子どもと映画」講義・登壇 2016年6～10月 お茶の水女子大学付属小学校 選択授業にて 選択授業「映画」実施 2017年～ フランスの国際的映画教育プログラム”Le Cinéma, cent ans de jeunesse（映画100年の青春）”のオフィシャルパートナーとして、同プログラムを日本にて実施 東京国際映画祭主催・東京都共催「TIFFティーンズ映画教室」を企画運営 2018年～ ”Le Cinéma, cent ans de jeunesse”の パリでの上映会″A nous le cinéma !（映画を我らに！）″に参加。映画教育に携わる15カ国以上の学校教育者と交流。 ※2020年、2021年は新型コロナウィルス感染症蔓延のため中止（2022年再開） 2019年　平成30年度国際交流基金海外派遣助成事業として 「こども映画教室（映画教室）南米・米国　公演・デモンストレーション」実施 チリのチリ大学において、「映画は学校だ！　映画教育に関する国際シンポジウム」にて講演（諏訪敦彦、土肥悦子） 文化庁「令和元年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演－実施 【実施校】C区分:小学校6校 独立映画鍋主催「映画教育のススメ～教育における映画の可能性～」に参加（中学生たち含む） 2020年　文化庁「令和2年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演－」実施 【実施校】C区分:小学校1校 文化庁「令和2年度子供のための文化芸術体験機会の創出事業」実施 【実施校】小学校6校 2021年　文化庁「令和3年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演－」実施 【実施校】C区分:小学校3校 文化庁「令和2年度第3次補正予算事業子供のための文化芸術鑑賞体験支援事業」実施 【実施校】小学校3校 2022年　文化庁「令和4年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演－」実施 【実施校】C区分:小学校6校　中学校1校　A区分:小学校4校　中学校1校 文化庁「令和3年度 補正予算事業　子供のための文化芸術鑑賞・体験再興事業」実施 【実施校】小学校2校 2023年　日本芸術文化振興会「令和5年度舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）」 【実施校】C区分:小学校4校 中学校1校　A区分:小学校9校　中学校1校

別添 ※別添は1企画につき3枚までとします。※文字のポイントの変更は認めません。

リンク先	No.2	【公演団体名 こども映画教室 】
企画のねらい	❶主体的な観客を育てる 映画はつくっただけでは完成しない。人が観て初めて完成する。 だからこそ、時代を超えて人々に愛される映画が名画とされる。同じ映画を観ても、観たときの年齢や状況によって感じ方が違うことがあるのも、映画が各人の脳（心）のなかでその人の経験や記憶を呼び覚ましていくからだろう。 そのように“映画を観ている「私」”を感じ、映画に対して「私なりの考えを持つこと」や「自分なりにその映画をうけとり、自分たちの頭の中で映画を作り出す」ということは普段あまり意識されない。そのような鑑賞は観る側にも鑑賞能力を必要とするからだ。 そこで、多角的な芸術鑑賞能力の向上のためには、このような、映画鑑賞における“主体的な観客”である姿勢をこどものころから大事にし、それを楽しく体験できる機会が必要である。 ❷発想力の育成や芸術鑑賞能力の向上 また、鑑賞のみではなく、鑑賞した映画に関連した撮影現場を体験することで、カメラの存在（アングルやサイズ、フィックスなのか手持ち、移動撮影など）や被写体の動き、演技などに気づくことができる。 こうしたこどもたちの発想力の育成や芸術鑑賞能力の向上を目指して本企画を実施する。 ❸名作鑑賞による地域交流 ワークショップ1回目は、世界に誇る日本の名匠、小津安二郎監督の不朽の名作『お早よう』 の鑑賞。映画館が街中からなくなっている今、体育館が映画館に変わるということは、地域の大人も含めて体験してもらいたいことである。その鑑賞に『お早よう』は最適であると考える。1959年の作品ではあるが、主人公の少年たちの気持ちは今のこどもたちでも共感できる。コミカルなシーンも多く、こどもたちにも大人にとっても忘れがたい映画鑑賞となるだろう。また、日本が世界に誇る映画監督である小津安二郎作品をこういう機会にぜひ鑑賞してもらいたい。 ❹映画を深く鑑賞する 鑑賞後のワークショップでは、映画に何が映っていたか、どんな場所が出てきたか、何が起こっていたか、というワークをやることで、映画の内容を振り返り、またいくつかのシーンでの主人公の気持ちを想像して書いてみる、というワークをすることで、より深く作品を理解していく。 ❺メディアリテラシーとして、映画撮影の実演を見ることで映像が創作物であることを理解する ワークショップでは、こどもたちの目の前で映画撮影の実演をする。クローズアップ、アングルを変えた撮影など、作品のなかの1シーンを再現してみることで、「カット割り」の概念も知ることができ、編集によって映像で物語るという、映画の特長を体感することができる。こどもたちは、映像が作られているものであるということを実感する。 ❻映画づくりには正解がないことを伝える 映画鑑賞においても、映画制作においても正解がないこと、自由な解釈ができることを伝える。 プログラム全体を通して伝えていきたいのが、リラックスして自由な発想をすることが大切であること。クリエイティブであるためには心を開放し、楽しさを感じながら映画を観たり作ったりしていくことを伝える。 こどもたちは自分なりの映画の観方を自由に発表し、“主体的に”映画を楽しみ、自分の観たいように観てもいい、という体験を通して、自己肯定感が育まれることもこの企画のねらいである。	

別添 ※別添は1企画につき3枚までとします。※文字のポイントの変更は認めません。

リンク先	No.2	【公演団体名 こども映画教室 】
プログラム全体の流れ	【全体の流れ】 【ワークショップ1回目】(20分) **① 導入・講師紹介・『お早よう』の時代やみんなとの共通点を探す(20分)** 【メインプログラム】(140分 *休憩10分を含む) **②「映画鑑賞」:鑑賞作品『お早よう』上映(94分／1959年／日本)** 休憩(10分) **③ 鑑賞プログラム (「お早よう」映画鑑賞シートを完成させよう！)** 「映画の中の主人公の気持ちを想像してみよう」(35分) こどもたちのあいだでは、とある遊びが流行っている。まだまだテレビが個人の家にはなかった時代の話。自分の家にもテレビを買ってほしい、と親にお願いする小学生の兄弟。ダメだという父親に抵抗して、テレビを買ってもらうまで大人に口をきかないというだんまりストライキをするというお話。 過去開催の本企画ではこどもたちが鑑賞したとき、時代を超えて主人公たちに共感し、大うけとなりました。 主人公の気持ちは映画の中で説明されません。それでも観客は主人公の少年に共感し、同じような気持ちになります。観客の想像力が映画を完成させているのです。私たちは「主体的な鑑賞者」なのです。そこに気づいてもらうプログラムです。 1) チームに分かれて映画鑑賞シートを用いて対話を促す問いかけをしながら、映画に登場した人物、場所を思い出し、映画鑑賞シートに付箋を貼っていく 2) 登場人物たちがどんな気持ちを想像して書き込む 3) 他のチームの映画鑑賞シートを見て違いを発見する 4) 主人公は映画のなかで自分の気持ちをセリフで話したり、ナレーションで説明があったわけではないのに、こどもたちが主人公の気持ちを書くことができたのは、実は鑑賞者は映画を受動的に観ているだけではなく、能動的に自分たちの想像力を働かせながら観ているのだという話をする。 【ワークショップ2回目】(55分 *休憩5分を含む) **④撮影実演ワークショップ(40分)** 『お早よう』に出てきた挨拶のシーンから「カット割り」についての説明。 映画スタッフが実際に1シーンの撮影を実演。 撮影したものを編集する様子をみんなでみてみる。 ※学校の希望があれば、児童・生徒から出演をする代表者を予め決めて出演をしてもらう 休憩(5分) **⑤上映会(10分)** 編集した1シーンをみんなで鑑賞する 特別講師(映画監督など)との対話・講評	